慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルティン・シュレーマン著/棟居洋訳『ルターのりんごの木 : 格言の起源と戦後ドイツ人のメンタリティ–』
Sub Title	Martin Schloemann (Japanese tr. by H. Munesue), Luthers Apfelbäumchen? Ein Kapitel deutscher Mentalitätsgeschichte seit dem Zweiten Weltkrieg
Author	野々瀬, 浩司(Nonose, Koji)
Publisher	三田史学会
Publication year	2016
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.86, No.3 (2016. 10) ,p.119(315)- 121(317)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20161000-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

マルティン・シュレーマン著／棟居洋訳『ルターのりんごの木―格言の起源と戦後ドイツ人のメンタリティ―』

野々瀬浩司

副題にあるように、本書は、宗教改革の歴史やその神学に関する研究書ではない。ここでは、現代ドイツにおいてルターの言葉として広まった、以下のような格言をめぐる歴史について記されている。

「たとえわたしが明日世界が滅びることを知ったとしても、今日なおわたしはわたしのりんごの苗木を植えるだろう（„Wenn ich wißte, daß morgen die Welt unterginge, würde ich heute noch mein Apfelbäumchen pflanzen.“）」と。

著者マルティン・シュレーマンは、ルター神学を研究している専門家で、一九七四年～一九九六年にヴッパータール大学において組織神学・歴史神学を講義していた人物である。著者は文献による研究だけでなく、多くの人々に対するアンケート調査やインタビューを実施し、さらには手紙や電話による精力的な情報収集を敢行し、この言葉の起源、意味・表現の変化、社会的影響力などに関する分析を行っている。本書には、戦後のドイツ人がどのような終末観を抱いたのか、そしてこの言葉の流布によって、それを克服して、どのように少しでも前向きに生きようとしたのかについて記されている。この本は、ある意味では神学研究者が行った風聞や噂の影響力を分析したコミュニケーション史や社会思想史というカ

テゴリーに属する。本書の章立ては以下のようになっているが、その全体的構成は、突如挿入された第五章・第六章を除けば、ほぼ年代順にりんごの苗木の言葉の意味や役割の変遷について、思想史的に叙述する形態をとっている。

まえがき
第一章　中心的問い―ルターのりんごの苗木の言葉、その真偽への問い
第二章　出現―困難の中にある人びとへの慰めと勇気づけの言葉（終戦前から一九四六年まで）
第三章　使用範囲の一般社会への拡大―生き残った人びとにとっての希望のしるし（一九五〇年まで）
第四章　定着した使用法―確認と同意の文（一九五〇年代）
第五章　手がかりを求めて―歴史的由来に関する仮説
第六章　新作説―似て非なるルター説、ルターと近代との関係
第七章　どういう意味で広く使われたのか―将来の言葉、楽観主義の慣用表現、生の象徴（一九六〇年代以降）
第八章　今後は使われないのか、それともまだ使われる可能性があるのか

本書によれば、この格言の起源はルターの著作ではないとされている。その他に、シュヴァーベンの敬虔主義者、キケロ、ヨハナン・ベン・ザッカイ、フリードリヒ・クリスティアン・ラウクハルトなどが候補として挙がったが、実際の作者は未だに確定されていない。恐らく一九四〇年代（ドイツの敗戦直前）に匿名の人物が、ルターの思想をくみ取って、新たに創作して広めたのではないかと推定されている。しかも、この格言を使用する際の状況と使う人によって、その表現や意味が変化したのである。例えば、教会政治上の勇気づけ、精神的慰め、自然に対して愛着をもって接するための行動の指針、キリスト教的終末の予兆、ストイックな黙示思想、政治的権限の付与、終末論的倫理などが表現された。

このりんごの苗木の言葉が急速に流布したのは、アンケート調査などから判断して、ドイツの敗戦直後ではなく一九五〇年頃である。戦後の復興、朝鮮戦争、東西冷戦の危機、環境問題に対しても、この言葉は用いられた。

次第にりんごの苗木の言葉は、社会の精神的基盤の基準の一つに成長し、ついには市民宗教（Zivilreligion）の働きをもつようになった。その言葉の普及範囲は一旦狭まったが、一九七〇年代に生態系の危機が不可避と見られると、再びその使用頻度は増加した。一九七〇年代、八〇年代にその言葉の使用可能性が、表現・意味・分野に関して幅広く拡大し、様々に組み合わされた。ただし、現代ではその使用頻度は減少している。時代とともにりんごの苗木の言葉は、普遍妥当性のあるもの、公共的なもの、市民宗教的なものから離れて、特殊なもの、個人的なもの、私的なものへと使われる傾向にある。日本のプロテスタント教会の人々の間でも、この言葉はルターのものとして広まっていた。

本書の魅力は、強い終末論的世界観をもったこの言葉の含意から生み出される、独特な緊張感によって深められている。りんごの苗木の言葉は、たとえ現実に世界の滅亡という絶望的な状況下に置かれていたとしても、希望をもって世俗の日常生活を、肯定的に前向きに僅かでも前進させるように訴えているのである。りんごの苗木を植えるという行為は、誰でも可能で、前向きな生き方だが、悲観的な状況ではとてもやる気にはならないことである。そのような逆説的な表現を含んでいるがゆえに、この言葉が多くの人々を解放し、力づけるメッセージとなったのである。なお本書を読了した後に、そもそも現代ドイツ人にとってルターとはどのような存在なのか、さらには、なぜ格言の成立の際にりんごの木が選出され、それ以外の樹木が選ばれなかったのかという二つの疑問が湧いてくるが、それは今後の研究課題ということであろうか。

（教文館、二〇一五年、三三二頁、二七〇〇円＋税）